



# CIF JAPAN

NEWSLETTER No.46

<https://cif-japan.com/>

**Council of International Fellowship Japan**

発行人 NPO 法人 CIF ジャパン 理事長 坂本正路

編集人 坂岡隆司 発行日 2021 年 8 月 1 日

事務局 〒607-8216 TEL 075-574-2800

京都市山科区勸修寺東出町 75 からしだね館

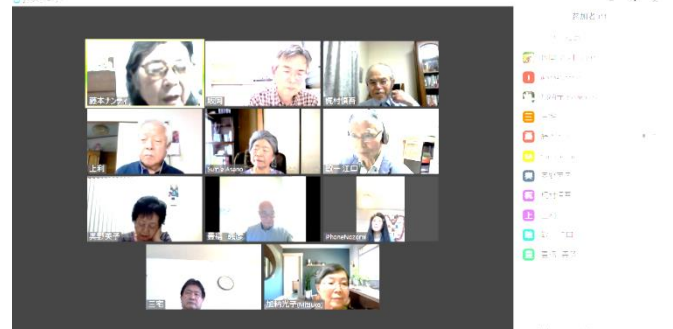
## 理事会・総会報告

去る 6 月 5 日 (土)、2021 年度の理事会、定期総会が、オンライン (ZOOM 利用) で開催されました。昨年の理事会、総会も、コロナのためやむなく集合は中止、書面表決のかたちで行われましたが、結局今年も集合での開催は出来ませんでした。その代り、今回オンラインという方法を試みたところ、理事会で 8 名出席 (委任状 1 名)、総会では、9 名出席 (委任状 13 名) という結果でした。皆さまのご協力に、心より感謝致します。理事会、総会の概要は以下の通りです。

- ◎2020 年度事業報告、決算報告、補正予算は、議案通り承認されました。
- ◎2020 年度事業報告、監事監査報告は、議案通り承認されました。
- ◎2021 年度事業計画、予算案は、議案通り承認されました。  
なお、本年 5 月、フィンランド研修に参加された藤原望美氏の研修報告会を、本年秋をめどに開催することとしました。
- ◎2020 年 10 月に予定され、コロナのために中止となった、第 3 回 IPEP 日本プログラムの準備については、11 月 6 日に開催する理事会で協議し判断することになりました。なお、プログラムに関する準備や具体的な対応については、理事会に一任することとなりました。

理事会総会の 1 週間前の 5 月 29 日 (土)、総会を前にした通信テストを兼ねて、ZOOM による「会員懇談会」を行いました。

参加者 (敬称略): 浅野純江、上利久芳、江口敏一、奥野英子、梶村慎吾、加納光子、坂本正路、坂岡隆司、豊福義彦、ナンディ藤本隼子 (インドより)、三宅浩。それに、フィンランド研修に参加されたばかりの藤原望美さんも参加。ご挨拶を頂きました。



懇談会の様子です。ZOOM のスクリーンショット

(坂岡記)

## フィンランド研修 報告会のお知らせ

コロナ禍の中の本年 5 月、国際交換研修 (IPEP=International Professional Exchange Program) のフィンランドプログラムに、藤原望美さん (大阪府社会福祉専門職・女性支援) がオンラインで参加されました。つきましては、次の日程で、藤原さんの研修報告会を行います。皆さまふるってご参加ください。なおコロナ感染のリスクを避けるため、今回は ZOOM によるオンライン開催とします。

【日時】2021 年 9 月 4 日 (土)

14:00~15:30

テーマ フィンランド研修を終えて

申し込み 2021 年 8 月 31 日までに、事務局長 (坂岡)宛メールでお知らせください。

⇒ [thomas@karashidane.or.jp](mailto:thomas@karashidane.or.jp)

申込者には、締切後、ZOOM の参加情報をお知らせします。

\*なお、報告会に関連して、フィンランドの社会リハビリテーション等の事情に詳しい奥野英子会員のお話も予定しています。

## 派遣のビフォー・アフター

～フィンランド研修に参加して～

藤原望美

(大阪府釈迦福祉専門職・女性支援)

「劇的ビフォーアフター」というテレビ番組がありました。熱心な視聴者ではありませんでしたが、ある時を境に大きな変化があることを表した、いいタイトルだと思います。フィンランド研修のために事前の準備はいくつも行いました。けれども事前と事後の感覚は全く異なります。まさに「派遣のビフォーアフター」というタイトルを付けたいです。

この度、CIF Japan のご推薦を賜り、2021.5.8-5.23 の期間、フィンランド研修を virtual の形で受けることが許されました。感謝に堪えません。



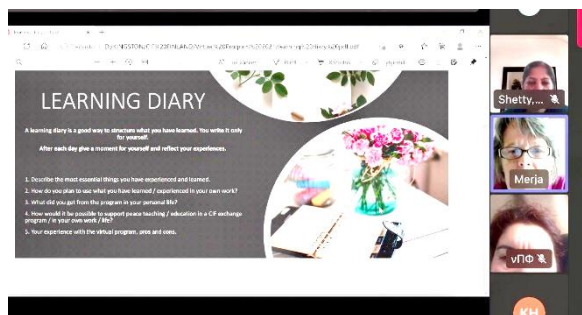
参加者は6名、スペインより2名、ギリシャ1名、タンザニア1名、インド・アフガニスタン1名、日本1名でした。virtualで行う以上、時差の問題があります。東アジアとヘルシンキでは6時間の時差があり、これが今回の大きな特徴であったと思います。4月末から2回にわたり、事前に teams でのミーティングを行いました。ヘルシンキでは真昼、日本では午後6時です。その他のメンバーは時差2時間程度ですからアジア人の私を参加者に加えるのかどうか、きっと現地のホストメンバーは考え抜かれたことと思います。6時間差のあるメンバーがいれば、開催時間の設定も勢い短くなりますから。しかし結果として、彼らは私を受け入れてくれました。

ヘルシンキでは昼の12時-2時ですが、日本では夕方6時-8時となります。受け入れ側のご英断といいたいでしょうか、これも一つの奇跡でした。

職場でも危機がありました。virtual ですから日中は勤務し、1～3時間早退けして研修を受ける予定をくみました。が、研修初日に同僚の1人に忌引きがあり(職場のメンバーは4人だけなのでかなりのピンチ)、勤務の予定変更を重ねることを余儀なくされました。でも、結果として私は全ての過程に参加ができたのです。途中では「どうして、何年もかけて準備してきたことがうまくいかないのか」と悲しくもなったときがありましたが、幾つもの危機の後には奇跡が重なり、私の研修は終わることができました。

多くのプログラムがありました。9コマの全体プログラムと20コマの専門プログラム。特に専門プログラムの最後日のコマは、終了時間が日本時間の午前2時になり、睡魔と戦いながらの参加でした。全体の講義はヘルシンキ大学の MOODLE というラーニングプラットフォームを使用することで、おそらく大学生の一般教養部分の YouTube 授業を使わせてもらったのだと思います。そこで、フィンランドという国の歴史、文化、政治、気候、人々の生活などをひと通り自分の都合の良い時間に視聴することで学習ができるというシステムでした。日本でも MOODLE は一部の大学で取り入れられ始めており、数年後には一般的になるのでしょうか、私にとっては未知のモノ。「え、画面上のどこをクリックしたら、その画面に入れるのですか?」とパニックに陥りました。最後は teams の画面に自分のパソコン画面を見せて「わかりません!」とフィンランド CIF の皆様に泣きつきました。他国のメンバーはスムーズに入れたみたいで、アメリカ・ブラジル・ヨーロッパ・インドあたりの大学教育では MOODLE 使用は現在30代前半の世代まで一般的であるようです。これは英会話スクールのインストラクターたちにインタビューして得た答えで「ノゾミ、ソレハ『piece of cake』カンタン ダヨ」と教えてくれたのですが、たとえばそれは実際の大学生活で隣席の学生に「ちょっと、ここどうなってる?」と日本語で尋ねると、

画面越しに英語で尋ねるのは、気楽さの度合いが違います。尋ねられたフィンランドメンバーは直ちにフィン語で何やら喋り始めたのですが、これを「詛りのきつい英語なのか」と誤解したものですから、私は聞き取ろうとしてパードン？を繰り返す始末。完全に混乱しました。「ノゾミ、私たちはフィン語で喋っている。気にしないでいい」となだめら



れました。

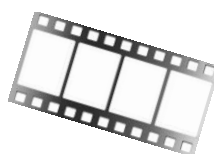
プレゼンテーションはいずれも良く練られたものばかりで、老若男女関わらずオンライン授業に慣れておられ、デジタル化先進国の力だと思いました。その中で、忘れられないテーマが3つあります。1つはミザアキ、2つ目はソーシャルワーカー協会がもつ多様な機能、3つ目は多様性を容認する共同体であることです。紙面の関係ですべては記すことができないのですが、ミザアキとは、フィンランドの孤立した男性（移民など）にフィンランド生活の先輩格のメンター男性をペアリングして適応を促すグループワークで、ライフイベント（離婚・DV・子育て）などにも良いプログラムが用意されているとのことでした。

オンラインでの研修ですから、繋がらなくなったらおしまいだな、ということも気づきました。タンザニアとスペインのカナリー島のメンバーはコネクションが不安定で、時々フツツと消えていくことがありました。この点でも日本のコネクションは安定しており恵まれていることに感謝でした。昔の人は油に火を灯してその臭いと戦いながら書物を読んだと言いますから、夜中に蛍光灯を付けた上にパソコンや携帯電話を駆使して海外の方から学べるなんて夢のような時代にうまれたものです。

勿論、学ばせていただいた授業のコマの内

容も質量ともに大きなものでしたが、何よりも海外メンバーと英語でやり取りができたことが感激でした。こんな中学生レベルの英語が通じた。返事を返してもらった。それだけで感動していました。最終日、さよならパーティーがありました。私は急いで浴衣を買いに走り、お能の「高砂」のキリの部分の謡を披露して「Cool!」と絶賛されました。スペインの女性は町の人たちと一緒に踊ったフラメンコのYouTubeを披露していました。

海外の人との交流できたことは、大きな刺激になりました。平和の問題を考えるにも、まるで「生徒会に参加するかのよう」な敷居の低さで政治に関心をもち、参加する北欧の人々の姿勢を見習いたいと思うようになりました。オンライン研修で得た海外の友を大事にすることが平和を作り出す一歩です。CIFの研修に参加することはここ数年の大きな目標でした。次のわたしの目標は、里親になることです。平和を作り出すにはまず家族から。マザーテレサが勧めたように「家族に対してもっと微笑む」ことから始めたいと考えています。平和について考え実行すること、そこにCIFの本質があるのだと思います。このように作り替えられた自分のことを大変喜ばしく思っております。感謝を申し上げます。



## 思い出の一枚

### 故清水義久さんと共に

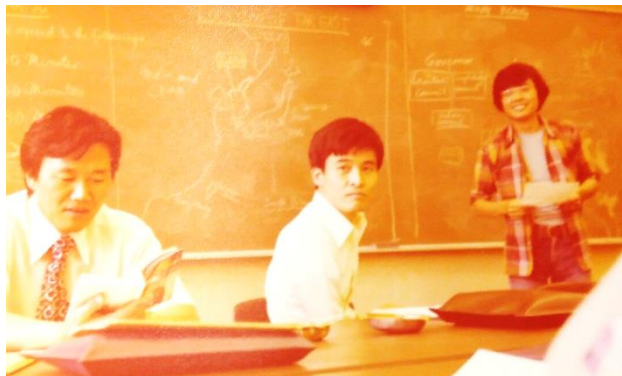
小山哲夫

(1977年 Cleveland)

故清水義久さんとは1977年クリーブランドでの研修仲間。心細い日本人同士、励まし合いました。時が経つにつれ、徐々に大胆・元気になる二人でした。そう若くもない二人がホームステイ先のプールで夜中のこともあり、素っ裸で泳いだこともあり。帰国後の1978年、清水さんをお勤め先の「共同



募金会」にお訪ねしたのが最後の出会いとなりました。その後 CIF ジャパンの役員としてご活躍をされているのを知っておりましたが、突然の訃報でした。思い出深い若い二人の写真です。



クリーブランド州立大学での文化交流。  
写真左より、韓国の Kwon さん、清水さん、筆者



筆者、パナマの友人、清水さん、スリナムの友人

## 香港BOYS

～思い出の一枚～

坂岡隆司

(1987年 Cleveland)

私の研修は、1987年オハイオ州クリーブランド。もう34年前になる。プログラムの冒頭、世界各国からの全参加者がニューヨーク国連本部に集結、レセプションとオリエンテーションが行われた。その後、参加者は全米各地の研修地に散っていった。

クリーブランド組は各国から30名ほど。まず郊外のエリー湖畔で2日間の合宿。それで一気にみな仲良くなった。その後順次ホー

ムステイ先へ移動。ホームステイは、タイプの違う3つの家庭にお世話になった。いずれも楽しく貴重な経験だった。研修後半の実習では、それぞれのテーマに沿った施設や機関が用意されていた。私の指定先は Menorah Park Center for the Aged というユダヤ人コミュニティの高齢者施設だった。1週間に1回は州立大学やケースウエスタン大学に集まって講義を受け、ディスカッションをやった。時にはみんなで一緒にダンスに行ったりもした。私の無茶苦茶な英語でよくまあこの研修が出来たものだと思議に思う。

この写真は、クリーブランド組のあるパーティのときのスナップである。香港から男3名が参加していたが、特に親しくなった。休みの日に4人でカナダのトロントまでドライブした。

あれからずいぶん年月が経つ。この間に香港も大きく変わった。「一国二制度」もなし崩しにされ、民主化運動もつぶされ、今やたいへんなことになっている。3人の香港ボーイズ(当時皆そう言っていた)とは、いつしか連絡が取れなくなってしまった。香港に自由が回復すること。彼らやその家族が、元気でいてくれることを願うばかりだ。



前列中央筆者。筆者の右隣と後ろに香港からの参加者

### 【編集後記】

暑中お見舞い申し上げます。  
コロナ禍でのオリンピック突入。ちょっと複雑な思いがします。お金やパフォーマンスはなくても、じみちな草の根の交流にこそ本物がある。そんなふうに思う次第です。

(TS)